

繩文の発見、ケルトやスティタイへの共鳴を経て、

■ 映画の夢、夢のスター

山田 宏一著

定着／流動、農耕／遊牧という対極的な文化から偏愛的に遊牧の哲学を獲得していく。それはいち早い、西欧中心の世界美術史の脱構築だった。

(講談社、1995円)

して断筆を宣言するきつかけにもなったとい

う。筒井康隆という類いまれな作家が、いかに形成されてきたかが分かる。

(朝日新聞出版、1365円)

■ 「文藝春秋」とアジア太平洋戦争

鈴木 真美著

菊池寛率いる総合雑誌「文藝春秋」とその周辺の文化人が、アジア・太平洋戦争に深く関与したのはなぜか。国際日本文化研究センター教授の著者が、戦争への態度を微

妙に変化させていった言論人たちの発言の真意に迫る。著者は、「文藝春秋」が海外向けに作つたタブロイド判の欧文付録「Japan Today」(ヤパン、2310円)

と、フランスの映画監督トリュフォーは言つたと

か。フランス語のエトワール(スター)が女性名詞であるのも故なしとする。男優、女優24人を

章もいい。だが、キャサリン・ヘプバーンの章はもつとい。男に追い掛けられるより、追い掛ける女。20世紀は性観念ががらっと変わつた。スターがそれを教えてくれる。

ずつずつしいくらいの傍若無人さと、ほれぼれするほどの自信で、男らしさを發揮したクラーク・ゲーブルを語る

(幻戯書房、2625円)

y」に注目する。菊池は単に戦争の旗振り役を務めた「素朴な愛國者」ではなく、戦争拡大に走る軍部をけん制していたのだという。知られざる出版物を丹念に研究した労作だ。